

令和 7 年 1 月 1 日 発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
Tel 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

今月の題字
柴田 蓉子さん

(ロサンゼルス在住)

富弘美術館を囲む会ロス支部長の柴田さんはネットで虹の架橋を読み、ロス支部会員さん達にも紹介してくれています。オレンジの花はCalifornia Poppy です。



虹の架橋



窪塚書道教室作品展

足利屋では今年も大間々町の窪塚英華書道教室の作品展を開催いたします。(一月二日〜二十六日) 作品は昨年十一月に富山で開かれた第五十九回日本北陸書道院展で院賞や特選を受賞した力作揃い。作品には書いた時の思いや感想が丁寧な字で添えられています。



小学二年の徳江沙奈さんは「きれいにほんもの花火のようにかけた」。小学三年の河内孝瑛さんは「特選をとれて皆がほめてくれて嬉しい」。両角菜里さんは「思いやるのも文字を書くのもむずかし

かった」。荻原優羽さんは「うまく書いてよかったです」。小学四年の舟山莉奈さんは「バランスをとれてうまく書いて良かった」。舟山莉奈さんは「美という漢字のじゅうしんをそろえて書くのががんばった」。小学五年の斉藤奈津子さんは「ポイントを見つけて上手にできました」。小学六年の両角武琉さんは「世の中が公明正大であってほしいと思う」。園原天胤さんは「先生が言ってくれた通りにやったら院賞がとれました」。徳江遥稀さんは「平和の和が苦手だったけど上手に書けたのでよかった」。渡辺月さんは、「字がむずかしかったけど見てやってよかったと思いました」。中学一年の森陽依さんは「習字は人生を変えてくれる習い事、今までありがとう」。大石悠衣菜さんは「私を救ってくれ、成長させてくれた習字。六年間有り難う」作品と一緒に一人ひとりのコメントも是非読んでみてください。

小耳にはさんだ
いい話
(文責・菊) 353

優郵お焚きあげ

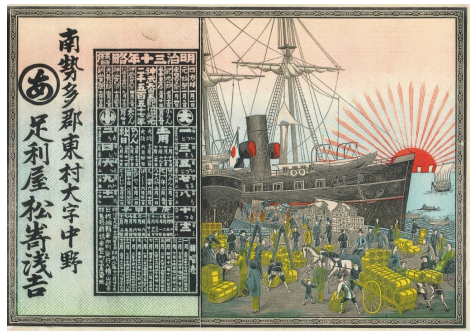
年一月第二土曜日に行われるお焚き上げの際に、一条の煙となつて天高く空にお届けします。優便ポストの横には、里みちこさんの「ありがとうとごめんさい」という詩が添えられています。

目でいえる 口でいえる
手でいえる 合掌でいえる
体でいえる 心でいえる
ふたつの言葉
ありがとうとごめんさい
どちらかひとつを選ぶとしたら
それはやっぱりありがとう
最期のことば ありがとう
自称・優便ポスト応援団長の永康隆さんとはフェイスブックの

世界一小さな
足利屋
トイレ美術館

今月の絵《353》

128年前の足利屋の『引札』



足利屋の初代・松崎浅吉は弘化四年六月に栃木県足利郡北郷村樺崎で生まれたという記録が戸籍謄本に記されています。浅吉は明治中頃、足尾銅山街道筋の南勢多郡東村中野(現みどり市東町)に店を構えました。明治三十年の正月に配った引札(チラシ)には、帆船に荷物を積み込む様子が描かれています。荷物は足尾で産出した銅や生糸だったのかもしれない。浅吉の三男・松崎友次は大正二年、花輪の本家から独立して二十二歳の若さで開業間もない足尾鉄道大間々駅前で足袋屋を始めました。大間々の足利屋は今年、創業百十二年を迎えます。

友達として繋がり、私も応援団員九百二十名の一人に加えていただきまし。永井さんは、「優便ポストは、心にチクツと刺さっているトゲを抜き、心を癒す優しいポストです。今はもう逢えないあの人に伝えられなかった「ありがとうやごめんさい」の気持ち、そして自分が一人で抱え込んでいた悩みや不安や迷い心を書き、て、〒690-3514 優便ポスト宛に送って下さい。(郵便番号と宛名だけで届きます) 文字は五年の歴史を持ち、人間を

進歩させた計画り知れないパワーを秘めており、心の鏡ともいわれています。その文字の力を信じて心につかえている気持ちを優便ポストに送って下さい。気持ちのスッキリ軽くなりますよ。令和七年のお焚きあげは一月十一日(出)前日迄に届けば間に合うそうです。あなたも手紙を出してみませんか。あの人」が天国で手紙を待っているかもしれまん。私も出します。



靖ちゃん日記

令和六年十二月十一日(水) みどり市市制二十周年と岩宿遺跡発見八十年などを記念して「朝のこない夜はない」(夜)という映画を作ることにになり、第一回の映画製作の会議に参加した。主人公は「岩宿の発見」によって日本にも旧石器時代の存在が証明された。相澤さんは納豆の行商などをしてながら独学で考古学を学び、学者や世間からの評価も高くなり、遂に東ロームから黒曜石の石器を発見した。この映画の監督は海外の映画界で多くの賞を受賞している金子雅和さん。金子監督は「熱い情熱とひたむきで偉業を成し遂げた相澤さんの生き方を皆に知ってほしい。海外の映画界にも出品したい」と言った。自分が小学生の頃、瀬戸川原の道端に捨てられた縄文土器のかけらを拾いにいった。縄文人に触れた気がしてドキドキした。高年齢になると、ドキドキは、不整脈と診断される。

ゴミ拾う白き軍手や初詣 毎月一日の朝は、ながめ公園周辺のゴミ拾いを続けています。平成十年に始まったゴミ拾いは、お正月も例外ではなく、令和七年一月一日の朝が三百十六回目になります。掃除仲間と一緒にゴミ袋を持って大間々駅から、ながめ公園の太鼓橋をくぐり、神明宮の大鳥居の前で帽子と軍手を外して、二拝、二拍手一拝をする。と心も清められる気がします。特に元旦は、ゴミ拾いの後に大間々庁舎の間々の土手の上から仲間と一緒に初日の出を拝みます。毎年同じことを同じように繰り返すことが出来る幸せを実感します。



虹の架橋 検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百五十四号は令和七年二月一日(土) 発行予定です。